



イスラーム研究所

معهد دراسات الشريعة

2007年マッカ巡礼会議及び巡礼報告

イスラーム研究所長 森 伸生

マッカへ出発

巡礼セミナー出席と巡礼の招待のために、サウジアラビアの巡礼省から航空券発券の知らせが届いたのが2007年12月3日であった。成田出発は12月7日、帰国は12月29日の日程が組まれていた。急遽、出発の準備をして、マッカへ飛び立った。

フライトはクアラルンプール経由でジェッダ行きである。まず、クアラルンプールで一泊。8日、空港に戻ると、イフラム（巡礼着）姿の巡礼者を30人ほど見かけた。私も空港のモスクでイフラムに着替え、小巡礼と巡礼を行う意思表示を行い、礼拝を行った。イフラムとは、巡礼者が巡礼聖域に入る前に巡礼の意志表明を行い禁忌状態に入ることであり、巡礼着のことという。男性のイフラムは二枚の縫い目のない白い布であり、一枚を腰に巻き、一枚を肩からかけるだけである。下着などはつけない。女性の場合には、特別なイフラムの服装はない。

飛行機は午後3時半、時刻通りに飛び立ち、5時間ほどでリヤード上空を過ぎ、巡礼聖域に近いとのアナウンスがあったので、巡礼意思を再確認した。ジェッダに着いたのは9日午後3時半を回っていた。巡礼省の係官の出迎えて、荷物の受け取りから入国までスムーズにすんだ。ただ、両手の指10本の指紋と顔写真までとられたのには驚いた。入国手続きが終わり、出迎いのリムジンでマッカのホテルへ直行した。マッカへ向う中で、ラッバイカ（アッラーのもとに参りました）の祈りを繰り返した。マッカに到着したのは夜10時を回っていた。

小巡礼挙行

ホテルのチェック・インをすませ、すぐにホテルのリムジンでマッカ中心の聖モスクへ向かった。小巡礼を行うためである。小巡礼とは、聖モスクの中心にあるカアバ聖殿を左回りに7回廻るタワーフの行を行い、次いで、聖モスクに内接しているマルワの丘とサファーの丘の間を3往復半行き来するサイイ行を行うことである。夜中の11時を過ぎていたが、すでに巡礼者がモスクの廻りにいっぱいである。カアバ聖殿の周りはまだ、人はまばらであったが、私がタワーフを始めると徐々に多くなってきた。とくにカアバ聖殿の黒石がはめられている角では人が立ち止まるので、全く動きが取れなくなってきた。それでも、どうにか、タワーフとサイイの行を終えた。そばにいたトルコ人巡礼者がハサミで中間の髪の毛を切っていたので私の髪の毛も切ってもらった。これで小巡礼が終わり、イフラムを解くことになる。ホテルに帰り、平服に着替え、眠りについた。

小巡礼は日時に関係なく随時行なうことができる。しかし、巡礼は健康と財産に恵まれたムスリムにとって一生に一度の義務と定められ、その諸儀式はイスラーム暦12月8日から13日の間に行われる。

宿泊ホテル周辺風景

12月10日朝6時にアザーン（礼拝の呼びかけ）で目を覚ます。これから毎日、これで目を覚ますことになる。やはりマッカに来ている実感

がわいてきて嬉しかった。近くのモスクに行き、暁の礼拝をすませた。モスクにトルコ人が多いのには驚いた。礼拝後にモスクの周りを散策すると、私が学生時代によく通ったアズィーズィヤ通りのそばである。母校のウムルクラー大学は通りの中ほどに位置している。私が通った1980年初頭では、岩山と数件の店屋と飯屋が並ぶだけであったが、今は通りの両脇は高層ビルが立ち並び、スーパーマーケット、銀行、電話会社、ホテルが軒をつらねている。通りの北側にある岩山の中腹まで高層ビルが建っており、私が宿泊したホテルもその中腹にある。

立ち並ぶレストランもしゃれたウインドウがあり、その多くがトルコレストランである。周辺のホテルの多くもトルコ人巡礼者の宿泊施設となっている。もう一方で、ホテルやビルの一角にペルシャ語で表示された看板が多く目立ち、イラン人巡礼者が宿泊している。イラン人特有のイマーマ（イスラーム式ターバン）や黒いガウンが通りに目立っている。

マッカ風景

明日（12月11日）がイスラーム暦12月（ズルヒジャ月）1日になると思っていた矢先に、テレビをつけると、西暦12月10日がイスラーム暦12月1日になったとテロップが流れている。新月を確認したとのことである。これで巡礼行事もすべてが一日繰り上がっていくことになる。イスラーム暦は陰暦ゆえに、新月の確認によって次の月が決まってくるので、しばしばこのような事態が生じる。一年間のイスラームカレンダーはあくまでも蓋然性を現したものである。

巡礼が始まる前に、マッカ郊外の要所を巡った。まず、預言者ムハンマドがマディーナへ移住したときに隠れたサウル洞窟のある山の麓まで行った。山の頂上近くに洞窟があるので、巡礼者のグループがそこまで登っているのが見える。

次いで、預言者ムハンマドが初めて啓示を受けた洞窟があるヒラー山へ向かった。ヒラー山にはすでに多くの巡礼者が登っていた。遠くから見れば、岩山に白い蟻の列が動いているようである。それから、マッカの中心にある聖モスクへと向かった。

聖モスクはマッカの中心に位置している。サウジアラビア政府は巡礼者受け入れ態勢を整えるために、毎年、莫大な予算を当てて、巡礼施設の改善、改築を行っている。最も力を入れたのは、この聖モスクの拡張である。1995年には100万人を収容できるほどになった。さらに拡張工事を続けており、現在はサイイ廊を増築している。また、聖モスクの周辺は巡礼者を受け入れるために、超高層ホテルが乱立しており、あたかも摩天楼の雰囲気である。私がマッカに住んでいた1970年代から80年代には、聖モスクのミナレットが市内で最も高く、その偉容を誇っていたが、現在はそれも周辺のビルに圧倒されている。昔の姿を知るものにとっては少々残念な思いもある。

聖モスクから東に入った路地の一角だけは小さなスーク（何でも市場）になっている。そこだけは今でも変わらない姿を保っている。食料品、香料、衣服までも何かもが揃っている。もちろん巡礼土産も多々揃っており、そのなかで今回目をひいたのがカアバ聖殿を形取ったペンダントである。それらすべてが外国製品であるが、巡礼者にとってそれ



セミナー風景

でもいい記念である。

すでに日が落ちかき日没の礼拝のアザーンがなり出した。周りのホテルから聖モスクへと巡礼者が集まってくる。100万人を収容する聖モスクにも入りきれず、聖モスクの周囲に礼拝用絨毯を敷きつめて、座っていく。私もその一人となった。

巡礼セミナー開始

巡礼省は毎年、巡礼の始まる前に、各国からイスラーム学者を招待して巡礼セミナーを開催している。今年は「預言者の別離の巡礼：儀礼とその価値」のテーマで、18カ国から50人近くのイスラーム学者を招待し、マッカのインターコンチネンタルホテルで3日間にわたってセミナーを開催した。この中で、興味深かった発表は「巡礼の容易化のための法的解釈」であり、年々増えていく巡礼者数による混雑を解消するために巡礼儀式を安全に確実にを行う解釈を説明していた。儀式を硬直的に捉えるのではなく、柔軟に儀式の基本的義務を重視し、付随した行為を省く考え方である。この解釈により巡礼者の流れをスムーズにしていけることができると、サウジアラビア政府も推し進めている。

一方、出席している学者との懇談のなかで、興味深い話が聞けて面白い。例えば、食事の席でモロッコ人学者とモーリタニア人学者が同席し、お互いの出身を話しているうちに、自分たちの部族の関係が近いことが分かり話が弾みだした。とくに国境近くの部族は行き来が激しいのでお互いの関係が強くなってきているなどと話していた。さらに、部族間でいざこざが起こったときなどはそれぞれの部族長が出てきて、話し合いで事を収めていくなど伝統的な方法は現在も踏襲されていることなどの話も出ていた。聞いていて、まさに部族の伝統が生きていることを実感した。

また、年配のトルコ人学者と話をしていくときに、彼が俗化したイスラーム社会を「宗教教育と一般教育を別にするのが問題である」と憂い、さらに「イスラーム世界が衰退したのはウラマーの怠慢に主たる原因がある。ウラマーはウンマの責任者であり、つねに時代に即した解釈をクルアーンとスンナ（預言者言行）から導き出す努力をすべきである。それを忘れるべきでない」と指摘した言葉が印象に残っている。

英国から来たイラク人学者は30年も前に英国に留学してそのまま英国に住み着いているという。彼は常にアラビア語を正確に話すことを心がけており、食事の席でこのように日本人ともアラビア語で話すことが出来ることは素晴らしいと感激していた。アラブから遠くなればなるほどアラビア語を守ろうとする意識が強く働くようである。

セミナーでは、テーマ以外にも、各国のイスラーム学者やイスラーム団体関係者による自国の状況などが報告され、各国のイスラーム関係者の交流があり、私も多くの知人を得ることができた。このように、毎年行われる中で新たな関係を呼び起こし、イスラーム・ネットワークの拡充と深化が行われている。

巡礼開始アラファートへの移動

セミナーも終え、12月17日（イスラーム暦12月8日）から巡礼開始である。セミナー参加者も再び、それぞれにイフラムに着替えて巡礼の意志表明を行う。私も夜7時に、全身沐浴を行いイフラム姿になり、巡礼の意志表明と礼拝を行った。10時半に巡礼省の準備したバスに乗り、アラファ平原（マッカから東へ25km）へ向かった。平日ならば30分ほどで到着するが、すでに巡礼者の車が移動を開始しているので3時間ほどかかって到着した。それでも、翌朝から本格的な移動が始まるので、まだましなほうである。なるべく巡礼儀式的容易化をめざしての早めの移動である。巡礼省の施設は男性、女性の部屋を分け、50人ほどの大広間である。食堂、トイレ、集会所、礼拝所などすべて完備されている。

12月18日（イスラーム暦9日）はアラファ逗留の日であり、巡礼で最重要日である。アラファ平原一面にテントが張られ、300万人以上の巡礼者が今、この地に逗留し、祈りの一日を過ごしている。

平原の中央に慈悲の山がある。その麓で預言者は別離の説教をした。多くの巡礼者が慈悲の山に集い預言者の教えを思い起こし、これまで犯した罪の赦しをアッラーに請うのである。預言者は「巡礼はアラファである」と伝えている。ゆえにアラファ逗留なしに、巡礼は成立しない。

巡礼のクライマックスである。アラファは「出会い」の意であり、アダムとイブがこの地で再開したゆえ、また巡礼者が人種を越えてこの地で出会うゆえに、アラファと呼ばれた説がある。

午前中にテント仲間と一緒に慈悲の山へ向かった。巡礼者にはそれぞれに名札が渡されており、施設から出るときにはその提示が求められる。施設の前は道路で、すでに巡礼者の車で埋め尽くされ、クラクションが鳴り響き、排気ガスと砂埃が舞い上がり、どんよりとした空気である。どうにか、道路を車の隙間をぬってわたり、慈悲の山をめざした。巡礼者が道路に勝手に飛び出さないように治安部隊が出動して、交通整理を行っている。勢いづいて進んでいる巡礼者を止めるのに、一箇所部隊30人くらいが手をつなぎ人垣をつくり、巡礼者を押しとどめている。次いで車を制止して、人垣をとくと、一気に流れるかのように巡礼者が慈悲の山へと向かって進んでいく。私たちも彼らが進むのにならして一緒に慈悲の山へ向かった。30分ほどで慈悲の山の麓に到着した。すでに、慈悲の山は巡礼者で埋め尽くされており、全く登る隙間がない。友人と一緒に、麓でアラファ平原に立っていることを実感した。帰り道も人垣をかき分けながら巡礼省施設にもどった。途中、同じテントの風景ばかりで、道を間違えて、一時迷子になってしまったが、どうにか、巡礼省施設にもどることができた。友人は不安そうにしていたが、巡礼省施設は交通整理要員が知っているの、すぐにはわかってもどることができた。一般の巡礼テントであった場合には、なかなか特徴が無く、アラファ平原で迷子になるとなかなか自分のテントを見つけるのが難しくなる。道路脇では政府の食料車がとまり、ヨーグルトや水、パンを巡礼者に配っている。サウジ政府からの巡礼者へのサービスである。

午前中は涼しく感じていたが、正午近くになると、さすがに暑くなり

気温は35度になっている。

巡礼省施設に戻り、昼食をとり、礼拝を合同で行った。その後、大広間でセミナー出席者の長老が巡礼の徳を語り、アラファ平原逗留の意義と重要性について説明を行ったのち、祈りを始めた。それにあわせて、すべての出席者がマッカの方に向かって手を挙げて、祈りを行った。何時間も続いて祈りが行われて、長老が疲れると、次に若手の者が代わりに祈りをつづけた。休んでは、祈り、休んでは祈りが続き、アラファ逗留の一日をすごした。皆がアラファ平原に逗留できた喜びに浸っている。そして、日没近くになり、アラファの一日の終わりが近づいた。



ミナーの石投げ風景

ムズダリファ、そしてミナーへ移動

日没とともに、アラファ平原に逗留しているすべての巡礼者がムズダリファに向って一斉に動き出す。300万人以上の人が一斉に動き出す様子は、祈りの静けさから一転して地鳴りをも思わせる騒音と空高く舞い上がる砂塵、まさに大地がうごめくかのようなものである。

巡礼省のバスも夜7時に出発した。しかし、施設の扉から道路に出るまでに2時間を要した。まったく、車が微動だにしない。時おり動いては止まりの繰り返しである。ムズダリファの谷に着いたのは、夜中の1時を回っていた。平時ならば30分もかからない距離である。ムズダリファは広大な駐車場のような情景である。夜中だが、電灯が煌煌とついでおり、明るい。バスをムズダリファの画に停めて、全員で日没と夜の礼拝をあわせて行なった。それから、小石を49個拾い集め、バスに乗り込み、ミナーの谷へ向かい、夜中の1時にミナーの巡礼省テントに入った。

テントに荷物を置くと、休むまもなく、アカバの石柱（小・石柱ともいう）へ投石に数人単位で向った。巡礼省のテントは石柱がある陸橋のそばにあるが、すべてを一方通行にしているの、遠回りをして、石柱へ進まなければならない。まだまだ、夜も明けないので、巡礼者も動き出しておらず、あまり混雑はない。ただ、疲れと睡魔で足元がふらついてくる。石柱への入り口の案内看板から歩き進め、陸橋にさしかかり、最初の大・石柱を見つけ、次に400mほどいくと中・石柱があり、最後にアカバの石柱が見えてきた。初日はこのアカバの石柱に小石を7個投げつける。石柱は現在50mほどの壁になっており、歩きながら投げつけることができる。ピスマッラー、アッラーフ・アクバルと言って投げつける。みんなが同じように投げつけているので、小石が壁に当たり落ちる音がしてくる。カチカチ、ザー、カチカチ、ザーと聞こえてくる。投げ終えて、私たちはそれぞれに持ってきたハサミで髪の毛を少し

切って、イフラームを解いた。それから、すでに犠牲のためのクーポン(360リヤール=9000円)を買っておいたので、羊の犠牲を捧げた意思表明を行なった。

アカバの石柱の先は、やはり一方通行になっており、そのまま下って、マッカの中心へ行く道か、またミナーの谷へもどるかの二股に分かれており、私たちは一旦ミナーのテントに戻った。朝4時を回っていた。イフラームを脱ぎ、普段着に着替え、しばらく休むと、5時に朝の礼拝の第1回目アザーンがあり、すぐそばにあるモスクへ行っただが、すでに満員となって、入ることができず、外で礼拝をした。

テントの仲間たちは休むことなく、着替えを済ませると、タワーフとサイイの行を行なうために聖モスクへ向った。私は朝食の後、しばらく休憩を取り、午後からミナーの谷の状況を見るために、ミナーの谷を横切っている陸橋の上に行き、巡礼者の動きを観察した。ムズダリファの方から投石のために悪魔の石柱に向かって人の波が押し寄せてくるさまがよく見てとれた。道幅いっぱいには隙間なく巡礼者が埋め尽くされ、一方方向に流れている。時折、一部の者が一方通行を横切ろうとすると、治安部隊が腕組みをして数十人で人垣を作り押し返していたが、他は至って整然と人が流れている。治安部隊はどのようなことがあってもこの一方通行を乱すことはなかった。今年は全くこの石投げの場で事故が起こらなかったのも、この石柱を石壁に改築したことと治安部隊による完全な一方通行規制のおかげであると思う。

日没後にミナーのテントから20分ほど歩いて、アズィーズィーヤ通りに出て、タクシーに乗り聖モスクまで行った。50リヤールである。普段の10倍である。運転手が交通止めの道もうまく切り抜け、30分ほど到着した。7時半であった。

聖モスクに着くと、夜の礼拝の最中であつた。一緒に礼拝した。それからタワーフを行った。1周、2周、4周まではモスク内の広間でカアバ聖殿を廻ることでできたが、徐々に人が増え始め、とうとう6回、7回目はモスクの回廊を回るようになった。カアバ聖殿を廻るだけならば、周囲の60メートルだけですむが、回廊を廻れば、その10倍はありそうである。途中でザムザムの水を飲みながら、元気をつけ祈りを声に出しながら行なった。さすがに足がもつれ、ふらふらしていた。7回のタワーフを終え、礼拝を行い、次いで、サイイ廊へ向かい、混雑していたので上の階でと思い、聖モスク屋上でサイイ行を行なった。屋上を歩くのははじめてのことであつた。最初はスムーズに行なうことができたが、やはり時間がたつにつれ、混んできた。サファーとマルワの間を3往復半、休み休み行い、やっとすべてが終わつたのは、夜10時を回っていた。

さて帰りのタクシーをどうするか、考えていたところに、タクシーが通りかかった。ミナーの中にはタクシーは入れないのでアズィーズィーヤ通りまでといったら、100リヤールと言う。オーケーを出した。タクシーに乗り込んだのは10時半頃であつた。30分くらいでつくだろうと思っていたが、とんでもない。渋滞で全く車は動かず、アズィーズィーヤ通りの中間で午前1時になった。そこで歩くことにした。アズィーズィーヤ通りからミナーのテントまで歩いて20分くらいであつたが、途中道がふさがつており警官が通してくれないので遠回りして帰った。やっとテントに入ったのは夜中の2時をすぎている。同室のチュニジア人もスーダン人もいない。まだ聖モスクかもしれない。とにかく非常食のビスケットを食べて、倒れるように寝た。

12月20日(イスラーム暦12月11日)ミナー宿泊3日目

午前中に投石行に行った。投石の場所には、小、中、大の標識が示してある。非常にスムーズに投石できた。遠くから眺めているといかにも混雑しているようであつたが、近くに寄ってみると、全く混雑はなく、巡礼者は順次投石を行いながら進んでいた。

午後1時から、アブドゥラー国王主催の昼食会に巡礼省招待客は出席することになった。アズィーズィーヤ通り側にある岩山の中腹に建てられている王宮に入った。招待客は700人くらいである。その中には、イランのアハマディ・ネジャーディー大統領も出席していた。国王は巡礼の成功を神に感謝し、参加した巡礼者に祝福の言葉を贈った。国王は毎年イスラーム諸国から要人たちを巡礼に招待し、宮殿に招いて歓迎する。そこでは巡礼外交が活発に展開されることになる。

日没後にミナーのテントにもどった。夕食後に、文化会が開かれて、聖モスクの歴史について講演が行われた。

12月21日(イスラーム暦12月12日)ミナー宿泊3日目ミナー最後の日

6時に朝の礼拝を終えて、そのまま投石に行った。三箇所の投石を終えてもどってきたのが7時半である。非常にスムーズである。これですべての巡礼の行事を終えることになる。最後にマッカを去るときに、別れのタワーフをするだけである。

11時からアズィーズィーヤのホテルに戻るとのことである。

11時の出発であつたが、テント施設の出口のところで、イラン人の勢いにのつたデモ行進があり、外にでることができなく、一時騒然となった。しかし、11時過ぎてもバスは来なく、とうとう金曜合同礼拝のアザーンがなり、全員で礼拝をした。それでも一向にバスが来る気配がない。バスが来たのは2時過ぎであつた。ホテルについたのは3時半である。部屋に入り、すぐにシャワーをあびて、アスルの礼拝をして眠った。マグリブの礼拝の時刻に目を覚ます。

夜9時から文化会が行われ、意見交換が行われた。セミナーについての意見が出ている。

例えば、「このセミナーにはサウジ人学者があまり参加していない。もしセミナーで意見がまとまった場合に、それがファトワー(法的見解)としてみられても、その見解の実施には地元のサウジ人学者の同意が必要である。つまり、今後ファトワーとみなされる見解を出せるセミナーにしていきたい。そのためにサウジ人学者の同席を求める」などの希望的な意見が注目を引いていた。

セミナー事務局長は最後に次のような意見を述べた。

セミナーで望むことは、巡礼の負担の軽減につながるものであってほしい。どのように行なっても巡礼は苦勞と忍耐がつきものである。そこで時間的な整理についてもウラマーの見解が必要であり、それが巡礼をスムーズに行なうことができる唯一の方法であり、混雑を未然に防ぐことができる。巡礼をスムーズに進めるために、いたる議論を無くし、混乱の元を断つことができるようにしていきたい。そのためのセミナーであってほしい。

事務局長はセミナーで強調されていた内容を繰り返して、述べていた。やはり、巡礼省にとって、いかに巡礼をスムーズに遂行させるかが重要な使命であることが理解される。

21日、22日、夕方から文化会が開催された。その中で、私は「日本におけるイスラーム状況」について講演を行い、50名ほどの出席者は大いに関心を示し多くの質問を受けた。とくに彼らが気にしていたのは日本における冠婚葬祭などのイスラーム法的手続きであつた。それはまずイスラーム法的手続きを行い、日本の役所に届けることになっているとの説明に納得した。

23日には、巡礼相主催の晩餐会があり、セミナー参加者は全員参加し、巡礼相から一人一人歓迎の言葉を受けていた。次の日には、マディーナへ出発するので、その夜中に聖モスクへ行きお別れのタワーフを行った。巡礼を無事終了することができたことに感謝し、またマッカを訪問することができるようにと祈り、聖モスクを後にした。

24日にマディーナへ向かい、夜の礼拝は預言者モスクにて行うことができた。預言者モスクの周りも沢山の超高層ホテルができあがり、巡礼者を受け入れている。モスクの中の一角に預言者廟があり、預言者ムハンマドと第一代カリフ・アブーバクル、第二代カリフ・ウマルが眠っている。巡礼者は廟を訪れ、預言者に挨拶をしている。モスクの側にはバキーウと呼ばれる墓所がある。そこは預言者時代からの墓所であり、第三代カリフ・ウスマーンが埋葬されている。マディーナは預言者の町であり、多くの預言者時代の遺跡が残っている。二日間かけて遺跡巡りを行い、27日にマディーナを去り、ジェッダの国際空港から帰国した。空港は巡礼者の出発で混雑の極みであり、飛行機も3時間遅れの出発となった。

11年ぶりの巡礼であつたが、マッカ、マディーナともに巡礼者の受け入れ態勢を整え、ミナーの投石場所の改築工事など、サウジアラビア王国は莫大な費用をかけ、イスラームの盟主としての威信にかけて、巡礼を無事に滞りなく遂行させることを崇高な任務としていることが実感できた。巡礼省の招待で巡礼セミナーに参加、さらに再び巡礼を実行でき、サウジ政府巡礼省に心から感謝の意を表したい。



アラファートの巡礼省の前で

第三回アズハル卒業生世界フォーラムマレーシア大会に出席して

イスラーム研究所シャリーア専門委員会 委員長 武藤 英 臣

西暦970年に創設されたカイロ市デッラーサ地区にあるアズハル・モスクはアラビア語でジャーミウ・アズハルというがこのジャーミウの意味するところは人々の集うところであり、その意味の通り単に信仰儀礼上の神（アッラー）を尊崇し礼拝する場所だけではなく。創設当初から知識を求める求道者達が世界各地から集う場所であった。西暦972年に、礼拝所に学問教習場が併設され、それ以来今日に至るまでアズハルはイスラーム世界最高峰の教育機関として知られている。

第三回アズハル卒業生世界フォーラムは、2008年2月15日から18日までマレーシアのクアラルンプールで開催された。

マレーシア・フォーラム開催

このフォーラムは2006年4月にエジプト・カイロで第一回が開催されている。その時、フォーラムは毎年預言者生誕日（イスラーム暦3月12日）の前後に開催したい旨が大学側から提案された。そんな中、前年同様エジプトで開催された第二回終了間際に、マレーシア政府代表が次回2008年世界フォーラムは是非マレーシアで開催するよう要請を受けたアズハルは、マレーシア政府との共催で第三回フォーラムをクアラルンプールで開催したものである。

こうして第三回アズハル卒業生世界フォーラムは、クアラルンプール市中心にある国際会議場ホールで開催された。アズハルからはアズハル総長、大学学長、副学長以下総勢30余名がマレーシア入りした。マレーシア以外の卒業生は100名ほどが招待されている。日本からは、飯森嘉助、徳増公明、武藤英臣の三名が出席した。マレーシア政府によれば、アズハル卒業マレーシア人は6,000名余に上るとのことである。国際会議場大ホールの収容人数は2500名程であり、初日の夕食会は国際会議場の中にある大宴会会場に国内外招待者1200名が参加して着席の夕食会であった。

開会式

2月16日の開会式は、マレーシア政府アブドゥラー・バダウィー首相、アブドゥラッザーク副首相、アブドルマジド・オスマーン大会実行委員長（現首相宗教顧問）、マレーシア・イスラーム宣教公社ムハンマド・ナハウィー総裁、アズハル側は、ムハンマド・タンターウィー・アズハル総長、アハマド・アッタイエブ・アズハル大学長が難壇に並んだ。

式でアブドゥラー首相は、ムスリムが自分の殻や自分のポストを守るだけでなく、もっと積極的に広くダイナミックな世界に足を踏み出すべきだと強調した。また首相は、世界のムスリムは二つの危険な脅威に曝されている。その一番目は、イスラームの敵から影響力ある攻撃とムスリムに向けられた言われ無き虚偽非難・中傷である。二つ目の脅威は、一番目よりもっと危険なこと、それはムスリム自身に表れる狭量性である。例えば、ある種のムスリムはイスラームを自分達の思い込みや限定的知識のみで注釈し、解説する。彼等は、物質的發展や肉体的成長は、イスラームの一部であることを理解しようとしぬ。狭量な人々はそれらをイスラームの敵がムスリムを混乱に陥れるために造り出したのであるとし、それらを拒否し、拒絶しようとする。この狭量性が度を過とし、過激派の類を惹起している。進歩や発展に背を向けた、これらの人々が正しい道から外れた方向に走りだす。この狭量性は、イスラームの敵がイスラームを攻撃非難するのに好都合でありイスラームの敵の宣伝に役買っているのである。この狭量性は初期の段階から治療しなければ、しばしば密かに人々の間に広がり、社会を蝕み、その崩壊へと繋がる。従って、ムスリムの学者や思想家達は、一般の人々が歩む正しい道を探り、教えていかなければならない。それぞれの国のイスラーム指導者たちと十分に協議し意見交換し、その国の進むべき道について議論しなければならない。同時にイスラーム学者や思想家は、イスラーム

がテロを支持し実行する宗教であるとする現代世界に蔓延するイスラームへの誤った見方や偏見を正して行かなければならない。イスラームの敵から投げ掛けられるイスラームへの偏見や誤解をムスリム学者やイスラーム思想家達は一致協力し正していくべきだと語った。その上で、バダウィー首相は「何故ムスリムは弱体なのか？」ということをもスリム自身一人一人が自問自答しなければならぬと述べた。ムスリムが弱体ということは、即ち殆どのムスリム諸国はその経済がまだまだ発展途上にあることを意味する。国の経済が虚弱で確りしていない。イスラーム諸国はまず国内の貧困を根絶し、経済の後進性を克服しなければならない。なぜならこれらがムスリム達をさらに弱体化させ困窮化させるからであるとする。

そのためにはバダウィー首相は、先ず人材育成から始めようと提言し、可能なイスラーム国は貧しいイスラーム国からの留学生を出来る限り多数受け入れ、知識を得た青年がそれぞれの国に戻りそれぞれの国の発展に寄与出来るようにするべきだ。例えば、マレーシアでは、人材資本育成と称し、青年に多方面な教育の機会を与えており、教育を得た青年は国の発展に多大の貢献をしていると訴えた。

またバダウィー首相は、将来のことばかりに熱中するだけでなく、ムスリムは過去の歴史からも教訓を得るべきであると述べ、過去の歴史から多くのことを学びとらなければならない。ある人々は、過去の追想や郷愁には生産的な物は無い、と言うかもしれない。しかし、歴史を

追想や郷愁だけで理解するのではなく、歴史から現在の我々を理解することが重要なのだ。歴史は絶対に嘘をつかない。マレーシアは、従って、「イスラーム・ハダリー」運動を積極的に推進している。「イスラーム・ハダリー」はムスリムに合理的、積極的、果敢に、意味ある方策を活用する思考方法を教えるものである。この試みに他イスラーム諸国も関心を持ち、マレーシアと共に歩んでくれると信じる。また、この試みに参加を望む国に対し、マレーシア政府は積極的に支援していきたい、と述べて挨拶を終えた。

一方、バダウィー首相の前に登壇したアズハル総長は、アズハル教育について説明し、いつもの通り、アズハルに学ぶものは

須らくクルアーンを暗記しなければならないと強調していた。

その他特記事項：

- 16日午前中マレーシアのイスラーム科学大学名誉博士号授与式があった。名誉博士号を授与されたのは他ならぬアズハル総長シェイク・ムハンマド・タンターウィー師であったことには驚いた。
- 翌16日午後から18日午前まで朝夕のセッションがあった。その中でマレーシアの学者が「イスラーム・ハダリー」について説明するセッションが二度あった。
- 各セッションのテーマを列記すると「人間文明におけるイスラーム遺産の重要性とその役割」、「イスラーム遺産について」、「イスラーム遺産の復興」、「西側からのイスラーム遺産への挑戦」、「現代的課題に対するアズハルの役割」等であった。
- アズハル総長、アズハル大学長、ザカズーク・エジプト・ワカフ大臣は多忙なため一日二日後に帰国したが、アズハル副学長二名は毎日の全てのセッションに熱心に参加していた。
- 元エジプト国会議長でイスラーム思想家として名高いスフィー・アブ・ターリブ氏は「改革とバランス」というテーマで講演を行った。彼は、20日家族と一緒に帰国の準備中急逝した。同行した夫人と数名のアズハル関係者に付き添われて無言の帰国をしたとのこと。19日我々日本人三名のすぐ隣で夕食をしていた同氏と帰国便について話合ったばかりで、この知らせを聞いて驚愕した。インナー・リッラーヒ・ワ・インナー・イライヒ・ラージウーン（アッラーの御慈悲がありますように）



アズハル総長（右から2人目）と一緒に

トルクメニスタン：トルコ系イスラーム団体の役割と問題点

拓殖大学海外事情研究所客員研究員 中島 隆晴

はじめに

近年中央アジアではイスラーム過激派組織の活動が活発化している。中央アジアのイスラーム過激派組織はアル・カーイダやタリバンと結託し、中央アジア各国政権の打倒を目的に執拗なテロ時活動を継続中である。当然の事ながら中央アジア各国政府は反政府活動を継続するイスラーム過激派組織に対する弾圧と取締りを強化しており、それに対しイスラーム過激派組織のテロ活動がさらに活発化するという悪循環に陥っている。

ところがトルクメニスタンではこうしたケースは見られない。むしろ同国ではトルコのイスラーム団体の活動が非常に活発であり、トルクメニスタンの経済・教育面において多大な貢献をしている。同国では権威主義的な政権とイスラーム組織が上手く共存しているのである。トルコのイスラーム団体がトルクメニスタンで果たしている役割、そして問題点について考察してみたい。

独立後のトルクメニスタンとトルコ

1991年、旧ソ連の崩壊によって独立を余儀なくされたトルクメニスタンは他の中央アジア各国と同様に経済的、社会的に大きな困難に直面することとなった。70年間ロシアの支配の元に置かれ、天然ガス、綿花生産のモノカルチャーを強要されてきた同国は市場経済マインドにも乏しく、長期的な国家の発展を図る上で不可欠な国際的水準の知識を持った人材の育成も大きく遅れていた。それまでロシアから供与されていた補助金も停止され、トルクメニスタンは国家再建に山積する難問を自力で解決せざるを得なくなったのである。こうした状況の中、ニヤゾフ前大統領は事態を打開すべく祖先を同じくするトルコ人に期待し、その誘致を積極的に進めた。トルコ人はニヤゾフ大統領の期待に応え、困難な状況にもかかわらず粘り強く事業に取り組み、この17年間トルクメニスタンの近代化に大きく貢献してきた。その結果今やトルコ人はトルクメニスタンの経済、教育の分野で大きな影響力を有するようになった。

トルコのイスラーム組織ヒズメットとトルクメニスタン

トルコ人のイスラーム組織の中でも特に大きな影響力を持つようになったのが、ヒズメット（トルコ語で援助、救済という意味）・グループである。ヒズメット・グループは一般にトルコのNGO組織として認知されているが、トルコでも有力なイスラーム指導者であるフェトフラー・ギュレン師傘下の組織であることも広く知られている。トルコでもヒズメット・グループは広範な経済・教育活動を行い、ZAMAN新聞やSAMANYORテレビといったメディアをも傘下に収めている。一説にヒズメット・グループは支持者300万人、総資産300億ドルを有する世界有数の巨大イスラーム組織であるともいわれ、トルコ社会に大きな影響力を有している。

ヒズメット・グループ傘下の企業がトルクメニスタンへの進出を本格的に開始したのはトルクメニスタンの独立から間も無い1993年頃であると言われる。ヒズメット・グループとニヤゾフ前大統領の最初の接触には、故トルクト・オザルトルコ大統領が仲介役を務めたといわれる。故オザル大統領は旧ソ連の崩壊以降、中央アジアに出現したトルコ系共和国との連携を強く志向した人物で、トルコ系共和国会議や中央アジア各国からトルコへの大量の留学生受け入れ政策を実施した大統領である。独立間もない時期にニヤゾフ前大統領から国家の再建について相談を受けたオザル大統領が、「信頼できる人々の組織」として紹介したのがヒズメット・グループであった。ヒズメット・グループはトルコ国内に独自の政党を有していないが、強力な経済基盤とメディアを背景にトルコ政界にも大きな影響力を有している。当時、オザル大統領の与党とヒズメット・グループは密接な協力関係にあり、オザル大統領の強い信頼を得ていたことがその後のトルクメニスタンへの進出を容易にした背景にあった。

トルクメニスタンへのヒズメットグループの経済進出

現在トルクメニスタンで貿易、建設事業に従事しているヒズメット・グループの企業は150社を超える。1993年から2007年までの14年間でヒズメット・グループのトルクメニスタンに対する総投資額は約27億ドルに達した。建設部門ではホテル、住宅、モスク、レストラン、記念碑的建造物の以外にも、綿花加工工場、石油・天然ガス生産プラントなど幅広い分野で建設事業を行っている。ヒズメット・グループ傘下の企業の最大の功績の一つが、トルクメニスタンの綿花加工産業の発展である。すでに述べたように綿花生産のモノカルチャーを強要されてきたトルクメニスタンは原料に付加価値を付けた製品を生産することを禁止されてきた。しかし、ヒズメット・グループの積極的な協力によって、トルクメニスタンは今や米国、ヨーロッパ市場に高品質の綿製品を輸出するまでになった。

トルクメニスタンの綿花産業の発展に特に貢献した人物として、トルコ人ながらトルクメニスタン繊維省次官を務めるアフメット・チャリク氏が挙げられる。同氏はヒズメット・グループの有力な事業家でありトルクメニスタンの独立以来、同国の綿花産業の発展に貢献してきた人物である。同氏

はこれまでに中央アジア最大の綿製品生産量を誇るトルクメンパン繊維工場をはじめ、数多くの綿花加工工場を建設してきた。現在チャリク氏傘下の企業で働くトルクメン人の総数は5000名を超え、年間15万トン以上の綿製品を生産している。なお、チャリク氏傘下のグループ企業の年商は1億8000万ドル以上に達している。

こうした優れた実績によってチャリク氏は、1999年にニヤゾフ前大統領によってトルクメニスタンからトルコへの石油・天然ガス供給大臣に任命されている。およそ外国人が一国の大臣の地位に就任することは通常では考えられないが、このことはニヤゾフ前大統領がチャリク氏とヒズメット・グループを強く信頼していたことを裏付けているといえよう。

トルクメニスタンの教育とヒズメットグループ

ヒズメット・グループはトルクメニスタンの経済面と並び、教育面でも大きな役割を果たしている。ニヤゾフ前大統領は国家の長期的発展を図る上で必要な人材を育成するため、1993年5月3日に独立後の教育改革の基本として「新教育政策」を発表した。新教育政策は海外教育機関による私立学校の開設を認めているが、これは一説にヒズメット・グループの教育活動をサポートすることが念頭にあったともいわれる。ヒズメット・グループは1993年にトルクメニスタンで教育事業を行う「バシュケント教育センター」という企業を設立し、「トルクトオザル・トルクメン・トルコ高校」をアシュガバッド市内に開設したのを皮切りに、全国規模で学校を開設している。2007年度時点で、トルクメニスタンで活動するヒズメット・グループの教育機関はトルクメニスタンの主要都市ほぼ全域で30を超え、約5000名を超える学生が学んでいる。

トルクメニスタンで急速な拡張を続けるヒズメット・グループの教育機関だが、短期間でこれほどまでの拡張を成し遂げることができたのは優れた教育カリキュラムにある。事実1995年以降ヒズメット・グループの教育機関に学ぶ高校生、大学生の中からは世界学術コンクールで入賞するものが相次いでいる。加えてヒズメット・グループの教育機関での学費は月80ドル程度と非常に安く抑えられているだけでなく、卒業後はトルコ系貿易、建設企業、また省庁への就職も比較的容易である。このためヒズメット・グループの教育機関への入学希望者は増加の一途をたどっており、近年受験競争が過熱化する傾向にある。なお、ヒズメット・グループの教育活動の資金は既述したチャリク氏のグループをはじめ、トルクメニスタンで活動するヒズメット・グループの企業家からの献金、さらにトルコ本国からの送金で賄われている。トルクメニスタン以外にもヒズメット・グループの教育機関はアメリカ、ロシア、東欧、南アジア全域など世界規模で教育事業を展開しているが、教育機関の設置に先駆けて現地で事業を行い、その収益を教育事業の基金にする方法は共通している。

ヒズメットグループの問題点

このようにトルクメニスタンの経済、教育両面で大きな役割を果たしているヒズメット・グループだが、いくつかの問題点も指摘されている。まず教育面では「学生差別」の問題が挙げられる。ヒズメット・グループの教育機関を卒業した学生達には就職、海外留学など様々なチャンスが与えられるが、それはヒズメット・グループの方針を遵守する学生に偏っているという点である。ヒズメット・グループの教育機関では教師達が率先して優秀な学生を宗教活動に勧誘する。具体的には、「イスラームについて学ぶ定期的な会合への招待」、「礼拝、断食、喜捨などイスラーム的慣習の実践の勧め」、「グループのリーダーであるフェトフラー・ギュレン師とその師であったリザーレー・ヌーン師の著作の読書奨励」などである。

両親から隔離されて集団生活を過ごす中で、学生達の間で次第にヒズメット・グループに傾倒し、その活動にのめりこむものは少なくない。教師達は基本的にヒズメット・グループのメンバーであるため、こうした学生達を重宝し様々な便宜を図るが、対照的にヒズメット・グループに批判的な学生達に対しては仮に優秀であっても差別する傾向がある。ヒズメット・グループの教育機関で働くヒズメット・グループとは関係のないトルコ人教師の中にも「トルコ人に対する間違った認識をトルクメン人の学生達に植え付けかねない」と危惧するものもいる。

一方ヒズメット・グループ傘下のトルコ企業に勤務するトルクメン人労働者の間からは給与面や待遇の改善について不満の声も高まっている。彼らの多くは月収70ドル程度だが、ヒズメット・グループに積極的に協力しているトルクメン人の中には倍以上の給与を得ている者も少なくない。こうした問題は早急に改善されるべきだが、基本的に宗教組織であるヒズメット・グループには解決が難しい部分もある。

ニヤゾフ前大統領の後を継いだベルディムハンメドフ新大統領もヒズメット・グループを信頼しており、今後ヒズメット・グループのトルクメニスタンにおける役割と存在感はますます強まっていくだろう。また日本が中央アジアでのビジネスや情報収集活動を行っていく上でも、大の親日派であり現地事情に精通している彼らとの連携は少なからぬメリットがある。ヒズメット・グループには宗教組織特有の問題点もあるが、日本を歓迎してくれる数少ない実力ある組織として認識しておく必要があるだろう。

クルアーン第3章（イムラーン家章）から学ぶもの

イスラーム研究所 主任研究員 柏原良英

はじめに

昨年度から始まったクルアーンのタフスィール（解釈）研究会は今年度はイムラーン家章を6回に分けて読んでいった。ここではその締め括りとして全体を通してそこに現れてくるテーマなり特徴をまとめて報告したい。

アッラーの唯一性と啓示の伝達者

クルアーン全体の基礎に流れているテーマはアッラーの唯一性とアッラーが啓示を降す者であり万物の創造主であることである。それは何度も繰り返され現れる。この章でもまず言及されるのがこのことである。「アッラー、かれの外に神はなく、永生し自存される御方であられる。かれは真理をもって、あなたに啓典を啓示され、その以前にあったものの確証とし、また（先に）律法と福音を下され、この前にも人びとを導き、（今）また（正邪の）識別を御下しになる。」（2～4節）この節の中の「啓典」はクルアーンであり、「福音（イエスに下されたインジール）」の確認としてもたらされ、また善悪の「識別（フルカーン：クルアーンの別称）」として唯一のアッラーから啓示されたものである。

啓典の民：

この章の名になっているイムラーン家はアッラーから選ばれ預言者を多数送られたユダヤ人の子孫であり、とくにユダヤ人の最後の預言者となったイーサーの母親になるマルヤムの生まれた一族である。ここではイーサー（イエス）誕生の話がマルヤム（マリヤ）の誕生にさかのぼり語られる。「本当にアッラーは、アーダムとノーフ、そしてイブラーヒーム一族の者とイムラーン一族の者を、諸衆の上に御選びになられた。」（13節）この節でアッラーはイーサーをユダヤ人の中のイブラーヒーム（アブラハム）から続く正統な預言者の系統に位置づけている。しかし、すべてのユダヤ人が正しくアッラーの啓示を伝えた訳ではなかった。ここにこの章のもう一つのテーマであるマディーナでのユダヤ人と対立が出てくる。預言者ムハンマドはマッカからマディーナにヒジュラ（移住）することで初めて信仰で結ばれたウンマ（共同体）を作ることが出来た。このウンマが大きくなるにつれて新たな二つの問題が現れて来た。それは新たにイスラームに入信する者の中に表面上はイスラームを標榜しながらその実は隙があれば元の自分達の権力を取り戻したいという願望を隠しているムナーフィク（偽信者）という人々が出てきたことである。彼らは裏からイスラームの妨害を行う者たちで密かに敵方のマッカの多神教徒と通じて画策したり、これもイスラームに対立するユダヤ人と通じて策略を行ったりした。このウンマ内部の問題に加えて2つ目の問題として外部からはマッカの多神教徒たちとの抗争がヒジュラ後2年して起きた最初の戦い（バドルの戦い）を機に本格化していくことが上げられる。この章はこれらの問題に対してイスラームがどの様に対処しその地位を確立していくかの過程と見た時にその示唆するものは大きい。

アッラーの許での真の教えはイスラームである

ムハンマドがマディーナにやって来た時にユダヤ人に同じ神を信じる自分の立場を示し呼びかける。「啓典の民よ、わたしたちとあなたがたとの間の共通のことば（の下）に来なさい。わたしたちはアッラーにだけ仕え、何ものをもかれに列しない。」（64節）しかし、彼を預言者と認めるかどうかで啓典の民ユダヤ人は意見が分かれた。ほとんどの者は、それを認める知識を持っていたにもかかわらず受け入れを拒否した。「本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である。啓典を授けられた人びとが、知識が下った後に相争うのは、只かれらの間の妬みからである。」（19節）さらにムハンマドを受け入れないユダヤ人に対し彼らがいかに本来の啓示をゆがめ更に預言者まで殺害するようになっていたと非難する。「かれらの中には、自分の舌で啓典をゆがめ、啓典にないことを啓典の一部であるかのように、あなたがたに思わせようとする一派がある。」（78節）「正義を無視して預言者たちを殺害した者」（21節）こうしてユダヤ人との決別していた。それはイスラームがユダヤ教でもキリスト教でもない本来のアッラーの許での教えであり、その具体的な見本はアラブの祖先であるイスマエールとユダヤの祖先のイブラーヒームの父である預言者イブラーヒームの中に見い出されるものであった。「イブラーヒームはユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなかった。しかしかれは純正なムスリムであり、多神教徒の仲間ではなかったのである。本当にイブラーヒームに最も近い人びとは、かれの追従者としての預言者（ムハンマド）、またこの教えを信奉する者たちである。」（67,68節）「アッラーは真実を語られる。だから純正なイブラーヒームの教えに従いなさい。」（95節）更にそれまで礼拝の方角（キブラ）をユダヤ人と同じエルサレムであったものをマッカのカアバ神殿に変更する。そこはイブラーヒームとイスマエールがアッラーの家として建てたものであった。「本当に人々のために最初に建立された家は、バッカ（マッカ）の

それで、それは生けるもの凡てへの祝福であり導きである。その中には、明白な印があり、イブラーヒームが礼拝に立った場所がある。また誰でもその中に入る者は、平安が与えられる。」（96,97節）

啓典の民の中での正しい者

マディーナにいたすべてのユダヤ人がムハンマドを受け容れなかったわけではなかった。「かれら（全部）が同様なのではない。啓典の民の中にも正しい一団があって、夜の間アッラーの啓示を誦誦し、また（主の御前に）サジダする。かれらはアッラーと最後の日とを信じ、正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、互いに善事に競う。かれらは正しい者の類である。」（113,114節）彼らは、ムハンマドを預言者として認めイスラームに入信した。

ウフドの戦いから学ぶもの

イスラーム教徒とマッカの多神教徒との本格的な戦いが始まったのはバドルの戦いであったがこの時は僅か敵の3分の1の軍勢でイスラーム軍は思わぬ大勝利を得た。「両軍が遭遇した時、はっきりとあなたに印があった。一つはアッラーの道のために合戦する軍勢、外は不信心な者であった。かれら（不信者）の眼には、（ムスリム軍勢が）2倍に見えた。アッラーは御心に適う者を、かれの救護で擁護される。」（13節）「アッラーは、あなたがたがバドルで微弱であったとき、確かに助けられた。」（123節）この勝利はまだ体制がしっかりと定まっていなかったウンマにとって大きな希望を与えると同時にイスラームに敵対する者たちに新たな脅威を与えることになった。それは翌年のマッカからの戦いを挑んできたウフドの戦いに現れる。結果はイスラーム側の負け戦になるが、このことから様々な教訓が与えられる。アッラーはこの戦いをムスリムに対する試練とした。「アッラーは、信者たちの善い者の中から悪い者を区別されるまでは、決してかれらを今の状態で放置されないであろう。」（179節）

- 1) ムナーフィク（偽信者）を分ける：ウフドの戦いに際しにムナーフィクたちは戦場への同行を拒否した。『「アッラーの道のために出征しなさい。それとも（自分の町を）守備しなさい。」と言われたと、「かれらはわたしたちに戦うこと（の価値）が分れば、あなたがたに従おう」と言った。その日かれらは、信仰よりも背信に近かった。』（167節）この「信仰よりも背信に近い」は彼らがいづもは信者と同じ行動をするのにこの時は信者が危険に晒されるのを無視して途中で引き返したことを指す。また亡くなった信者について『「かれらがわたしたちの（言）に従って、座視していたら、殺されなかったものを。」と言う者がある。』（168節）
- 2) 信者の中の信仰の強弱を分ける：ウフドの敗戦に不平を言う信者が出た。『一度あなたがたに難報が下ると、且つてこれに2倍する程の打撃を（敵に）与えたのに、あなたがたは言う。「これは一体どうしたことか。』（165節）敗戦の原因は彼らが預言者の命令に従わなかったことにあった。『だがかれが、あなたがたの好むもの（戦利品）を見せられた後、しりぞみするようになり、事に当って争いはじめ、ついに命令に背くようになった。』（152節）
- 3) ジハード（聖戦）で亡くなった殉教者は、天国の小鳥の中で生き続ける：ムナーフィクから戦争で亡くなったものを非難する言葉が聞かれたときアッラーは彼らが生きていと語る。『アッラーの道のために殺害された者を、死んだと思ってはならない。いや、かれらは主の御許で扶養されて、生きている。』（169節）
- 4) 困難に際しての言葉：『「わたしたちには、アッラーがいれば万全である。かれは最も優れた管理者であられる。』（173節）これは信者があらゆる困難な状況に遭遇した時の言葉になる。

人類に示された理想のウンマ（イスラーム共同体）

マディーナにおいてイスラームは自分達の共同体を持つという新たな段階に入った。しかし出来たばかりのウンマはその内外に多くの問題を抱えてもいた。その対処としてこの章ではその方法が明らかにされ、イスラームとしての目指す姿が示されることになる。『あなたがたは、人類に遺された最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、アッラーを信奉する。』（110節）『あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない。』（103節）『あなたがたは一団となり、（人びとを）善いことに招き、公正なことを命じ、邪悪なことを禁じるようにしなさい。これらは成功する者である。』（104節）アッラーの教えを守り、一団となって善を勧め悪を禁じる時、イスラーム共同体は人類をリードする最高の集団となるのである。この理想の共同体を求めることが今もイスラーム社会とイスラーム教徒一人一人に求められているのである。このイムラーン家章は、イスラームがその小さな共同体を作ったときからどのような試練を通り理想の共同体を目指すようになっていったかを知る上で、クルアーン全体を通して最もよくまとまった一章と言えるであろう。

ハディース入門 (10) – ジャーヒリーヤ (イスラーム以前) のアラブ

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

はじめに

今回より、ムスリムたちがハディースを重視し信じる理由について、様々な視点から検討していく。まずはジャーヒリーヤのアラブについて、時代背景や社会・宗教事情を概観し、彼らが言葉を重視する理由や条件、情報の収集・伝達的重要性と方法を外観し、イスラーム出現以降のアラブが何故預言者ムハンマドの言葉を信じるのができたかを考える。

時代背景

ジャーヒリーヤとは「無知である」という状態を示す動詞「ジャヒラ」の能動分詞形「ジャーヒル」に由来し、直訳すれば「無知な状態、主義」となる。通常イスラーム以前約150年間のアラビア半島の状況を指す。西暦の紀元5世紀後半から同7世紀初頭に相当する。

この時代は、世界的にも、激動と混乱の時代であった。西アジアではササン朝ペルシアが、遊牧民族の侵入、マズダク教の政治介入、ビザンツ帝国との戦争などに悩まされながらも、6世紀半ばには東西の中継貿易を独占してその全盛期を迎えた。地中海域では527年にビザンツ帝国の皇位に就いたユスティニアヌス帝が地中海世界の再統一に成功したが、6世紀の後半には北から侵入してきたフランクによってイタリア半島の大半を奪われ、ササン朝ペルシアとの戦いなどでその威勢は、既に形骸化していた。

アラビアの地勢と社会

アラビア半島は、ササン朝ペルシアとビザンツという二大帝国に挟まれていた。南アラビア地方のヒムヤル王国は古代エジプトのプトレマイオス朝との貿易の中継地として栄えたが、6世紀に入ってその重要性が薄れていた。半島北部ではキリスト教徒が生活し、紅海を挟んで南アラビアに対峙するエチオピアのアクスム王国に影響を強めようとしていた。半島周辺にはキングダ王国やヒール王国、ガッサーン王国等キリスト教系の諸王国があったが、ジャーヒリーヤ時代の末期にはいずれも抗争により衰退または滅亡していた。

諸王朝の抗争により東西を結び交易路が衰退すると、代わってアラビア半島の紅海沿岸が新たな交易路として注目されるようになった。同地を本拠地とするクライシュ族の中で、富裕な者たちは自己の隊商を組織し交易を営み巨万の富を独占するようになった。逆に同じクライシュ族でも貧困層に属する者たちはそうした恩恵に浴することなく、貧富の差は拡大する一方だった。同一部族内で富者が貧者を援助するという意識は、物質主義の前に廃れてきていた。

半島内陸では、オアシスを中心にナツメヤシ栽培を主体とする農耕業と、羊の放牧を主体とする牧畜業が生計の柱となっていた。部族が生活単位で、運命共同体でもあった。農耕、遊牧を営む一方で、部族内の連帯意識が生存の条件であり、名誉や勢力を巡る他部族との争いに明け暮れていた。

宗教事情

周辺諸王朝の少数派宗教が、ジャーヒリーヤのアラブに影響を与えていた。ササン朝ペルシアの国教はゾロアスター教であったが、領土内では国王・祖先崇拜、ゾロアスター教から分かれた善悪二神論、マズダク教、マニ教、太陽崇拜のミトラ教、バビロニア由来の占星術や魔術、ギリシア起源の神話なども広く信仰の対象となっていた。また半島の北東部ではビザンツ帝国のキリスト教、南部ではヒムヤル王国のユダヤ教が信仰されていた。

一方、マッカの聖殿は古来より偶像崇拜の聖地であり、各部族の守護神が偶像として安置されていた。また交易の中継基地でもあるって、半島内外から多くの人が絶えず来訪し門前町・宿場町として繁栄していた。

連帯意識

イスラーム以前のアラブ遊牧民は部族単位の連帯意識に特徴付けられる。彼らは遊牧と並んで、部族間の抗争に明け暮れていた。部族連帯意識によってアラブは部族単位で強固に団結し、部族構成員は遊牧という生活の糧を得ると共に、敵対部族との抗争から身を守ることができた。部族間抗争に果敢に挑む勇気も、誇りとされた。

ムハンマドが属したクライシュ族もマッカ近郊の山岳地帯で遊牧生活を営んでいたが、彼の5代前の先祖であるクサイイの時代にマッカに定住するようになった。定住後も交易という手段でしばしば移動はしていたし、部族連帯意識も薄れてはいなかった。マッカの守護者というこの上ない地位と栄誉を維持するためには、強固な連帯意識が必要だった。

部族は血縁を重視し、優れた功績を持つ祖先を誇りとする。このことは後に預言者ムハンマドを受け入れ誇りとする下地に繋がっていると言える。つまりムハンマドはクライシュ族の名門のハーシム家の出身であり、さらにクライシュ族の祖先を遡れば、アラブはみな預言者イスマーイール(イシュマエル)に達し、さらに人類の祖アダム(アダム)に遡ることをイスラームは明らかにした。預言者に対する信仰によって、一部族の構成員という意識は人類の構成員という意識に変わったのである。アラブの部族の系譜が預言者の系譜に繋がることにより、部族連帯意識が人類同胞意識に昇華した。信仰による同胞意識は、部族を超えて、より強大・強固な団結を生み出した。つまりアラブにはイスラームを、つまりムハンマドの言行(ハディース)を受け入れる基盤ができていたと言える。

財産と富の概念

交易や商売に長けたアラブにとって、利益を得るためにはある程度の出資が必要であることは自明の理であった。多くの利益を得るためには多くの出資を必要とすることも、彼らにとっては周知の事実であった。ただ彼らの意

識の中で現世で得た利益は現世において使わなければ意味がないと考えていた。彼らは、現世における人生がすべてであり、死ねばすべてが無になると考えていた。

現世で得た利益を来世のために費やすという教えは、現世の延長線上に来世が存在するというイスラームの説明によって初めて理解された。つまり死んでしまえば全てが終わりという考えが変換できれば、ムハンマドの言行も受け入れられるものとなるのである。

言葉と情報の重要性

文字が発達していない社会では、言葉が情報伝達の主体となる。ジャーヒリーヤのアラブは、言葉を重宝し、言葉には人々を惹きつける特別な力があると信じていた。そこで彼らは言葉の魅力と重要性を強調していた。現実的な情報は勿論、非現実的であっても魅力的な言葉は、常に彼らの心を捉えた。詩人が朗誦する長詩、憑霊師が唱える宣託、占いや魔術はいずれもジャーヒリーヤのアラブの間で信じられ、社会的にも重要な役割を演じていた。いずれも言葉を駆使したものである。当時のアラブにとって最後の審判を説く初期の啓示とそれを彼らに伝えたムハンマドの言行は非現実的だったが、それは幻想的、魅力的に受け止められ、熱狂的に支持される要素を含んでいた。

新たなスナへの待望

ジャーヒリーヤ時代のアラブが信じて疑わなかったものは財力、知力、武力である。社会的な地位は、これら3つの力を併せ持つて頂点に立つ者に集約されると信じられていた。彼らが信仰していた祖先伝来の宗教は、その力を維持するために必要と信じられていた。しかし、上記3つの力を維持するために必要な、あるいは利用できる教えが別にあるとすれば、彼らも祖先伝来の教えに盲従する必要はなかった。一方、ジャーヒリーヤのアラブが外来の宗教を受け入れた大きな理由は4つある。

第一は、現状に満足できず、空しさを覚え、新たな宗教的教えに精神的な癒しを求める者が少なからずいたこと。第二は、隊商や伝道師らの活動を通して、周辺諸宗教に関する情報が半島内に流入してきたこと。第三は、言葉に対するアラブは反応が敏感で、言葉による情報の収集・分析能力に傑出していたこと。第四は、宗教の名の下に富と権力と名誉を独占しようとする思惑が強く作用していたことである。

ジャーヒリーヤのアラブに広まった宗教は、原始的なアニミズムが主流で、各部族はそれぞれに定めた自然物を崇拝していた。一方で一部の定住民の間ではユダヤ教やキリスト教も知られていたし、特定の宗教には属さずに唯一神信仰を实践するハニーフと呼ばれる者たちもいた。

ジャーヒリーヤのスナ

ジャーヒリーヤ時代には、人々が従うべき特定の言行や慣例を権威付けてスナといった。具体的には父祖伝来の教えである。スナは絶対的な権威を持って、人々の生活を律していた。人々もスナに従うことによって、身の安全が保障されていた。クルアーンの中では、次のような表現が見られる：

『あなた以前に遣わした使徒たちに対する(わが)慣行は(皆、こう)であった。あなたは(わが)慣行に変化を見出すことは出来ない。』(夜の旅章17:77)

またスナという単語には、人々の間で周知の「前例」、「(過去の)出来事」という意味もあった。

『昔の者たちへの先例があったのに、かれらはこの(啓示)を信じない。』(アル・ヒジュール章15:13)

クルアーンとハディースの中のジャーヒリーヤ

クルアーンの中には、ジャーヒリーヤという語が4回使われている(3:154、5:50、33:33、48:26)。いずれもマディーナ時代の啓示で、イスラームの教えが確立しつつあった当時においても一部のアラブの間で根強く支持されていたジャーヒリーヤの思想や慣習を「愚か」、「間違い」、「迷い」、「無道」、「無節制」、「不道徳」といった意味で否定するために使われている。これらの中で比較的古い啓示では、

『かれらが求めるのは、無明(時代)の裁判であるのか。だが信心堅固な者にとって、アッラーに優る裁判者があるうか。』(食卓章5:50)

のように、無明(ジャーヒリーヤ)とイスラームが同等の対比で示され、未だ両者の力関係が拮抗していたことを物語っている。逆に比較的新しい啓示になると、

『一部のものは自分のこと(だけ)を苦慮して、アッラーに対し間違った(多神、無神論者の)考え方をして愚かな憶測をし……』(イムラン章3:154)

のように、ムスリムたちの間でジャーヒリーヤ＝「愚か」という公式が常識化していたことが理解できる。ジャーヒリーヤは、イスラームの始まりと同時に完全否定されて消滅したのではない。ジャーヒリーヤは多くの場合に反面教師として、イスラームの誕生と発展に少なからぬ影響を及ぼしていた。

ハディースの中では、ジャーヒリーヤという語は、次のように使われている。「おまえはその男を母のことで罵倒したのか、お前はジャーヒリーヤの心をもつ人間だ。」(牧野訳3:29)

イスラームでは、奴隷といえども兄弟として接しななければならない。理由は何であれ主人という立場を利用して自分が所有する奴隷を見下すことは認められない。イスラームの教えに反する行為は、ジャーヒリーヤの心に起因することをこのハディースは示している。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成20年3月18日発行
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
 原 良英

ムハンマドとイスラームの誕生(3)

5 一孤児ムハンマド

(1) ムハンマドの誕生：象の年

(2) 父親アブドラー：クライシュ族ハーシム家出身

ムハンマドは「象の年」のラビーウルクワッラ月（太陰暦三月）12日曜日夜に生れたとイブン・イスハークのムハンマド伝には記されている。

ムハンマドの父はクライシュ族ハーシム家出身のアブドラーであり、母はクライシュ族スワラ家出身のアーミナであった。父のアブドラーはムハンマドが生れる前に、シリアへの隊商に参加しその帰りにヤスリブ（メディーナ）で死んだ。

ムハンマド（讃えられた者の意）と命名したのは祖父のアブドル・ムッタリブであった。この名前はアラブにとって非常にめずらしい名前であった。

(3) 祖父アブドル・ムッタリブの保護

ムハンマドはハーシム家の家長であるムハンマドの祖父アブドル・ムッタリブの保護のもとで、母アーミナの手によって育てられた。当時、暑さの厳しいメッカでは、幼児を涼しい高原の遊牧民に里子にだす慣習があり、ムハンマドも慣習に従い、遊牧民サアド・ビン・バクル部族のハーリスとハリーマという夫婦のもとに里子に出され、そこで2年ほど過ごした。

サアド族のところにいるときに、2天使がムハンマドの心臓を清める事件がおこり、このことがあった後に彼は母のもとへ帰されたと伝えられている。彼が5歳の時であった。

(4) 伯父アブー・ターリブの保護

彼が6歳になったとき、母アーミナは死に、祖父アブドル・ムッタリブも2年後に他界した。その後は、ムハンマドはハーシム家の家長となった伯父のアブー・ターリブのもとに引き取られ、成人するまで、伯父の家で育てられた。

伯父に可愛がられ育てられはしたが、孤児として辛さ厳しさを痛感した思いは後のイスラーム社会の孤児救済などに大いに反映されている。

(5) シリアへの隊商

ムハンマドが12歳の時、アブー・ターリブはシリアまでの隊商に甥のムハンマドを伴ったことがある。ムハンマドはこのシリアへの旅で様々な体験をし、見聞を広めた。そのとき、ブスラー（ポストラ）のキリスト教の修道士バヒーラーがムハンマドの背中に預言者のしるしを見付けたと伝えられている。このようなエピソードの真偽のほどは定かではないが、少なくともムハンマドがシリアへの旅でキリスト教などにも接していたことが理解される。

少年時代は羊の放牧などを手伝い伯父の家計を助けた。彼が14・5歳の頃、部族どうしの争いで伯父たちの後方支援で参加するなどして、最初の合戦を経験した。青年のころムハンマドは大商人の横暴を正し、社会正義を訴えた有徳者同盟の結成にも参加した。

(6) 富裕な未亡人ハディージャとの結婚

青年期に達したムハンマドは簡単な取引などを手伝っていたが、決して生活は楽ではなかった。しかし、彼の誠実さはクライシュ族のなかで知られていた。アミーナ（正直者）と呼ばれていた。

そのような彼を見込んで、クライシュ族アサド家の富裕な未亡人ハディージャはシリアへの隊商をムハンマドに任せた。ムハンマドはハディージャの期待に応えて、見事な成果を挙げてシリアから帰ってきた。

ハディージャは、噂にたがわず真面目で信頼にたたるムハンマドを気に入り、彼に結婚を申し込んだ。彼は申し込みを受けハディージャと結婚した。ムハンマドは25才、ハディージャは40才のときであった。

ハディージャとの結婚はムハンマドにとって人生の一大転機であった。経済的には、妻のハディージャの資産をもとに、安定した幸せな生活を築いた。

孤児として育ったムハンマドにとってハディージャとの結婚ははじめての暖かい家庭であり、子供にも恵まれ、3男4女を授かった。しかし、ザイナブ、ルカイヤ、ウナム・クルスーム、ファーティマの4人の娘たちは成人したが、カーシム、ターヒル、タイプブの3人の息子たちは幼児の頃に早死にした。

ハディージャは経済的な面ばかりではなく、内面的なムハンマドの支えにもなった。のちに、ムハンマドが初めて啓示を受けた時の彼の動揺を止め、

預言者であることを諭したのもハディージャであった。彼を信じ最初の信者になったのも彼女であった。ムハンマドはハディージャが生きている限り、他に妻を娶えることはなかった。ムハンマドとハディージャは最も理想的な夫婦として、イスラーム教徒たちの模範となっている。

(7) カアバ神殿の再建：35歳頃

結婚してから啓示を受けるまでの15年間のムハンマドについてはほとんど知られていない。その中で唯一伝えられている事件がカアバ神殿再建の時の事件であり、それはムハンマドのクライシュ族の間での評判および彼の公正を基本とする判断が表れている事件として伝えられている。

世俗人としてのムハンマドは、孤児の厳しさを味わい、放牧にて自然に接し心の豊かさを養い、商売や政治に参加し戦いも経験して社会の在り方を肌で感じ、そして幸せな結婚生活を築き、すべてに実直に生きてきた「アミーナ」（正直者）の姿がそこにはあった。しかし、単なるお人好しの正直者ではなく、有徳者同盟にも積極的に参加する正義感に燃える果敢な人物であったことがうかがえる。ムハンマドは様々な経験をしてきたのであるが、ただし、文字を覚えることなく成長したことをここに伝えておかなければならない。後世のイスラーム学者達はムハンマドが文盲であったことに、イスラームの啓典コーランがムハンマドの著作ではなく、神の言葉であることの一つの根拠としている。

研究会報告

【平成19年度第4～6回タフスィール研究会開催】

今年度第4回目のタフスィール（クルアーン解釈）研究会が、11月24日同志社大学の四戸教授により、また5回目平成20年1月26日当研究所シャリーア専門委員会委員長・武藤英臣客員教授により、6回目が2月23日に原良英・当研究所主任研究員によってそれぞれ午後2時より文京キャンパスF館で開かれた。今年度のタフスィール研究会の研究範囲であるクルアーン第3章はこの6回目の発表を持って無事終了することが出来た。この研究会を通してイスラームの基礎であるクルアーンを一節ずつ取り上げ、その意味やその節が啓示された背景を理解することで表面上の意味だけでなく深い理解が得られたと自負している。それはまたシャリーアを理解する上では是非知っておくべき事柄でもある。この研究会は来年度も引き続き行っていく予定ですので是非、興味のある方はふるって参加していただきたい。そして一人でも多くの人に生のクルアーンに接してイスラームの基礎がどこにあるのか、何を目指しているのかを理解してもらいたいと願っている。それがこの研究会を行っている最大の目標であり意義である。

محتويات العدد

- 1 ندوة الحج الكبرى ومناسك الحج
رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
- 2 الندوة العالمية الثالثة – خريجي جامعة الأزهر
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : هيدنيومي موتو
- 3 مقال : بحركة الأتراك في آسيا الوسطى
باحث زائر بمعهد دراسات الشؤون الخارجية : ناكاهيرو ناكاجيما
- 4 مقال : ماذا نفهم من دراسات التفسير؟
باحث معهد دراسات الشريعة : يوشيهيدي كاشيهارا
- 5 مدخل الحديث (10) عناصر مقبول الحديث الشريف في العهد الجاهلية
طالب دكتوراه بجامعة ملايا أكاديمية الدراسات الإسلامية :
هيروفومي أوكي
- 6 السيرة النبوية (3)
- 7 أخبار المعهد: الدورة الرابعة إلى السادسة لدراسات التفسير